

横山 巖 監訳

脳卒中の運動訓練プログラム

木村 彰男 (慶應義塾大学医学部リハビリテーション科)

我が国では脳卒中患者の死亡率はかつての1位から3位へと後退したが、リハビリテーション医学における対象疾患としての脳卒中の位置づけはその生命的予後が改善されるにつれ、ますます大切になってきている。一方、脳卒中片麻痺患者の機能訓練法は種々の神経生理学的反射を応用した方法であるが、訓練手技のみが過大に評価され、△△法や○○法というように名づけられ、あたかもそれが唯一最良の方法であるかのごとく宣伝される傾向が強い。そして、各々の訓練手技の正当性を科学的な裏づけにより客観的に評価することができないことも、この傾向を助長させる要因の一つとなっている。

このような背景の中で、本書の呈示している『運動訓練プログラム (MRP)』は、訳者である横山先生も序文で述べておられるように、科学的な裏づけはないものの、詳細な文献検索をもとに、数多くの神経生理学的現象を基礎に構築された見事なアプローチ法といえる。MRPは患者に発症後できるだけ早期に、日常生活動作に関連した運動コントロールを再学習させることを目的としているわけだが、特に患側の筋活動と機能的運動を訓練するように心がけ、患側および健側の代償的筋活動や運動を防ぐことを強調している。

具体的なMRPの方法は、まず再学習しようとする動作を、健常者と比較して徹底的に分析することから始まる。そして、欠けている要素の練習と、全体としての動作の練習を行い、最後に日常生活動作の中へ応用していくための訓練を行う。実際にはこ

れらの過程をステップ1～4までの4段階に分けて展開するわけであるが、本文の中では上肢機能や座位・立ち上がり・歩行などの動作について各ステップが非常に分かりやすく解説されている。特筆すべきことは、嚥下を中心とした口腔顔面機能も一つの重要な動作として取り上げられていることである。最近ではリハビリテーション医学の面から、積極的に嚥下障害についてアプローチするようになってきているが、その際に理学療法が重要な意味を持つことが本書からも良く理解できる。

さて本書は3部から構成されているが、第1部では主にMRPが生まれた背景が説明され、第2部では上記のMRPの実際のプログラムが示されている。最後の第3部ではMRPの理論的背景として、中枢神経系の回復の機序やフィードバック機構が多く文献を引用して解説されているが、理論の根拠に基づいた科学的な訓練プログラムを形づくろうとする著者の意欲が大いに感じられる内容である。

既に述べたように、本書は日常生活で応用できることをその基本姿勢としているので、実際の訓練に携わる理学療法士・作業療法士ばかりでなく、リハビリテーション医学に関係する医師・言語療法士・ナースをはじめ、他のリハビリテーション関連の職種の方にとっても極めて実用的な本と思われる。また、患者の家族へ訓練を指導する際にも役立つであろうことは間違いなく、是非一読することをお勧めしたい。

(B5判 200頁 5,974円(税込) 1991年 医学書院 刊)